

百人一首と「もみぢ」

奥山に もみぢ踏みわけ 鳴く鹿の 声きく時ぞ 秋は悲しき

猿丸大夫

(現代訳) : 山奥で散ったもみじを踏み分けながら、妻を求めて鳴く鹿の声を聞くと、秋は悲しいものだと感じられます。

花札などの図柄にもあるように、紅葉と鹿というモチーフは秋を代表する伝統的なデザインですね。「もみぢ」といえば、「紅葉」を思い浮かべる人が多いと思いますが、平安時代前半までは、「黄葉」でした。この歌に登場する「もみぢ」も、実は萩のような「黄葉」であったと考えられています。

百人一首の中に「もみぢ」を詠んだ歌は6首あります。同じく、桜を詠んだ歌も6首です。数だけで見ると、桜と同等ですが、撰者の藤原定家は「もみぢ」が好きであったと言われています。競技かるたの札の裏にも「紅葉」のデザインが描かれています。定家が百人一首を選んだ鎌倉時代は、「紅葉」へと変遷していたと考えられます。黄や赤の「もみぢ」の色の違いを想像しながら歌を鑑賞すると、さらに深い味わいがありますね。

小野田高等学校小倉百人一首かるた部顧問 青池のぞみ